

六七 徐祚筆 漁夫圖

東京 侯爵 井上三郎氏藏

絹本着色 挂幅装

竪八二・三厘(二尺七寸一分六厘)
横四九・六厘(一尺六寸三分七厘)

侯爵井上家の藏弁のうちにこれあるを知られた名品、宋元畫中の隠れのない優作であるが、いま同家の厚意によつて新たな寫影を掲げる。實にこの一幅、秋空に揺らぐ稿蘆を描いて、渺茫たる水波に臨む五六莖が遙かに頭上に亂れるあたり、縦横の細筆に載せた枯葉の颼々を耳にするものは獨り畫中の漁夫のみではない。

かゝる謹恪にして澄明な畫趣はもとより南宋の院體を外にしては求むべくもない。觸目の自然に乖かずして而も省簡を盡した構圖、蘆葉の眞態を極めて且つ整齊を失はぬ用筆、或は足下の貝殻、漁夫の籠にも謹細な院畫の風尙の徹せざるなきを覺える。就中その筆は蘆に鋭い動きを見せ、漁夫にあくまで度んだ整ひを示すとは云へ、何れは精到な細筆の一法で、唯之のみによつて蘆と人と水との一景を描破してこの清高な畫境を致した手腕は最も嘆服に値する所である。而してかゝる用筆はもとより事物の精寫に用ふべくして山川の風趣を描くに適するものではない。之を茲に試み來つた所に本圖の最も特異な點を存する。即ち當代通途の山水畫と全く軌を異にし、飽くまで寫生の域に始終した作品として院體の一風を徴すべき稀品である。例へばその土坡の如き、淡墨の一線を畫して之にあるかなきかの點と染とを加へた、この宛かも遲疑するが如き寫實味にもよくその意の徹するのを見る。

右下方に款して「廣陵徐祚」と云ふ。この圖の名の高きに拘らず、なほこの人の傳の未だ明かならざるも人皆の知る所で、畫乘の缺惜んでもなほ餘りあるものがある。かの題名碑錄に載せる嘉靖頃の進士といふ同名の人の之に擬し得ない事は重ねて云ふまでもない。廣陵はかの有名な琴曲の名の故地、今に江都

徐祚筆 漁夫圖款印(原寸)

の縣名を以て呼ぶが、南宋畫院の徐氏中にも之と本貫を同じくするものすら聞かない。印一顆「□之」、恐らく祚の字であらうが文明かにして而も未だ讀み得ないのを自ら深く愧づる。掲げて大方の示教を乞ひ度い。

唯その時代をこの圖に省るとき、院體寫生の構想のかゝる域に進んだものは恐らくは夙い頃ではないであらう。その筆線の熟成の跡にも既に之を物語るものがあると共に、若しこの土坡の皴法に併せて例へば蘆穗の點描にやゝ平調の憾ありと云へるならば、之等の畫法にも漸く一型をなせるものゝあつた事が考へられる。即ち所謂宋末の一作であらう。或はまた進んでその款署に字印を併せ鈴した風が南宋院畫の通態にやゝ異なる事を挙げ、且つはその傳の逸した點にも、世の胡元に移るに當つて院人の世に埋れたものゝ多かつたのを想像して、之をその頃の人とするとしても必ずしもこの圖の様式と矛盾するものではないと思ふ。(渡邊)